ユメノソラホールディングス株式会社 様

「とらのあな」のビジネスを加速する ハイパーコンバージド・インフラストラクチャを導入

インディーズコミック(同人誌)の販売で圧倒的なシェアを誇り、日本のサブカルチャー文化を牽引するショップ「とらのあな」。同店を運営する「株式会社　虎の穴」をグループ企業に持つユメノソラホールディングスが、既存の業務システムをハイパーコンバージド・インフラストラクチャに移行することによって、TCOを削減させるだけでなく、ビジネスのスピードを大きく向上させている。新たなアプリケーションを立ち上げる際にハードウェアの調達が不要になるからだ。「今後の成長へ向けた基盤が構築できた」。虎の穴でストアマネジメント事業を指揮する鈴宮英朗氏は、こう評する。

導入前の課題

- 事業の成長や新サービスの展開といったビジネスのスピードに、ITシステムの調達・開発が追いつかない
- 情報システム管理部門のメンバー8人では、約200台あるサーバーの運用保守作業が限界に

導入製品：DataCore Hyperconverged Virtual SAN

導入後の効果

- ハイパーコンバージド・インフラストラクチャの導入により、柔軟なシステム開発と迅速なサービス展開が可能に
- 物理サーバーで稼働している既存システムをハイパーコンバージド・インフラストラクチャに移行することでサーバー台数を削減、サーバー関連の費用は5分の1に

株式会社 虎の穴は1996年の創業以来、一貫してクリエイターが生まれる土壌であるインディーズコミック市場を牽引し、クリエイターの創作活動の支援を行っており、また同時に、インディーズコミック市場で圧倒的な存在感を見せるショップ「とらのあな」を全国に23店舗展開(2017年8月現在)する、日本のサブカルチャー文化を牽引する存在だ。

約200台のサーバーの運用保守が限界に

グループ企業のビジネスを支えるITシステムの開発・運用を担っているのが、ユメノソラホールディングスの情報システム管理部門だ。これまで、グループ企業における事業の拡大や新サービスの提供に合わせて、同部門がシステムを導入してきた。グループ全体のビジネスが急成長しているため、システムの数は年々増えてきた。2016年にはサーバーの台数が約200台にも及んでいた。

この膨大な数のシステムを運用保守する作業が、同社にとって大きな負担となっていた。平均すると週に1台は何らかの障害が起こっていたという。例えば、ハードディスクが故障したために交換するといった作業が発生していた。情報システム管理部門の責任者を務める保山啓氏は、「システムの開発・運用を担当するメンバーは8人しかいません。運用保守の負担が限界に来ていました。この人数で運用保守が可能な台数を超えてしまったのです」と語る。

そこで、同社ではシステム基盤の再構築を検討。新システムの要件として、運用保守の作業負担を軽減することだけでなく、システムを柔軟に拡張できることを掲げた。後者の要件を掲げた理由を、虎の穴で事業部長を務める鈴宮英朗氏は次のように語る。

株式会社 虎の穴
ストアマネジメントセクション
事業部長
鈴宮 英朗氏（右側）

ユメノソラホールディングス 株式会社
情報システム管理部門
責任者
保山 啓氏（左側）

＜ユーザープロフィール＞

企業名
ユメノソラホールディングス株式会社

本社所在地
千葉県市川市田尻1-8-36

設立
2013年10月

URL
https://yumenosora.co.jp/

＜構築パートナー＞

企業名
デジタルテクノロジー株式会社

URL
https://www.dtc.co.jp/

「虎の穴では、売上高を3年以内に2.5倍に引き上げることを目指しています。これを実現するには既存のビジネスを伸ばすだけでなく、新しいサービスや新たなビジネスモデルを次々と打ち出さなければなりません。これらを支えるシステムを極めて短期間で導入できる仕組みが必要だと考えたのです」。

こうした要件を満たすために、情報システム管理部門はシステム基盤を仮想化することを決断。仮想化環境を搭載した単一のシステム上に既存の業務サーバーを順次移行することを目指した。個別の物理サーバーで稼働しているアプリケーションを仮想化環境に集約すれば、運用保守すべき物理的なサーバー台数は激減する。さらに、仮想化環境なら、物理サーバーに障害が発生した場合にアプリケーションが稼働している仮想マシンを別の物理サーバーに瞬時に引き継ぐことも可能なため、システムの可用性も大きく向上する。

仮想化のメリットは、これだけにとどまらない。ネット通販も手がけている虎の穴では、世界最大規模のインディーズコミックの即売会「コミックマーケット」の開催時にウェブサイトへのアクセスが急増する。仮想化環境であれば、柔軟にシステムリソースを調整できるため、コミックマーケット開催時には仮想マシンを増やしてシステムのパフォーマンスを維持することが可能なのだ。

DataCore Hyperconverged Virtual SANを搭載したHCIを導入

情報システム管理部門は、2016年の初めに何社かのITベンダーに新システムの構築を打診。4社の提案が選定候補に残った。その中から、最終的に選定したベンダーがデジタルテクノロジー株式会社（以下、DTC）である。DTCの提案は、同社のソリューション「D-RAID ADVANCE」を用いて、既存のシステムをハイパーコンバージド・インフラストラクチャに置きかえるものだった。

ハイパーコンバージド・インフラストラクチャ（以下、HCI）とは、CPUやメモリなどのコンピューティング機能と、その上で稼働する仮想化ソフトウェア、そしてストレージソフトウェアによるSANを1つの筐体に収めた仮想化基盤のことである。「D-RAID ADVANCE」は、仮想化ソフトウェアとして「VMware vSphere」、データを管理するSDS（Software-Defined Storage）としてデータコア・ソフトウェアの「DataCore Hyperconverged Virtual SAN」を搭載したHCIだ。

仮想化基盤に必要なコンポーネントが全てそろっているので、導入後すぐに利用を開始できる。そして、新しいアプリケーションのためにサーバーが必要になった場合には、仮想化環境の上で新たに仮想マシンを起動するだけでよい。わずか数分の作業で新たな仮想マシンを調達できるので、これまでのようにハードウェアの調達に数週間も待つ必要はなくなる。

コンパクトな筐体に仮想マシンを高密度に集約できることもメリットだ。運用保守が容易になるだけでなく、物理サーバーを格納するラック数も大幅に削減できる。

こうした点を評価して、ユメノソラホールディングスはDTCの提案を選定した。ほかにもHCIを提案したベンダーもあったが、トータルの導入コスト面でもDTCの提案が最も優れていたという。

従来のシステムと比較してサーバー関連の費用は5分の1に

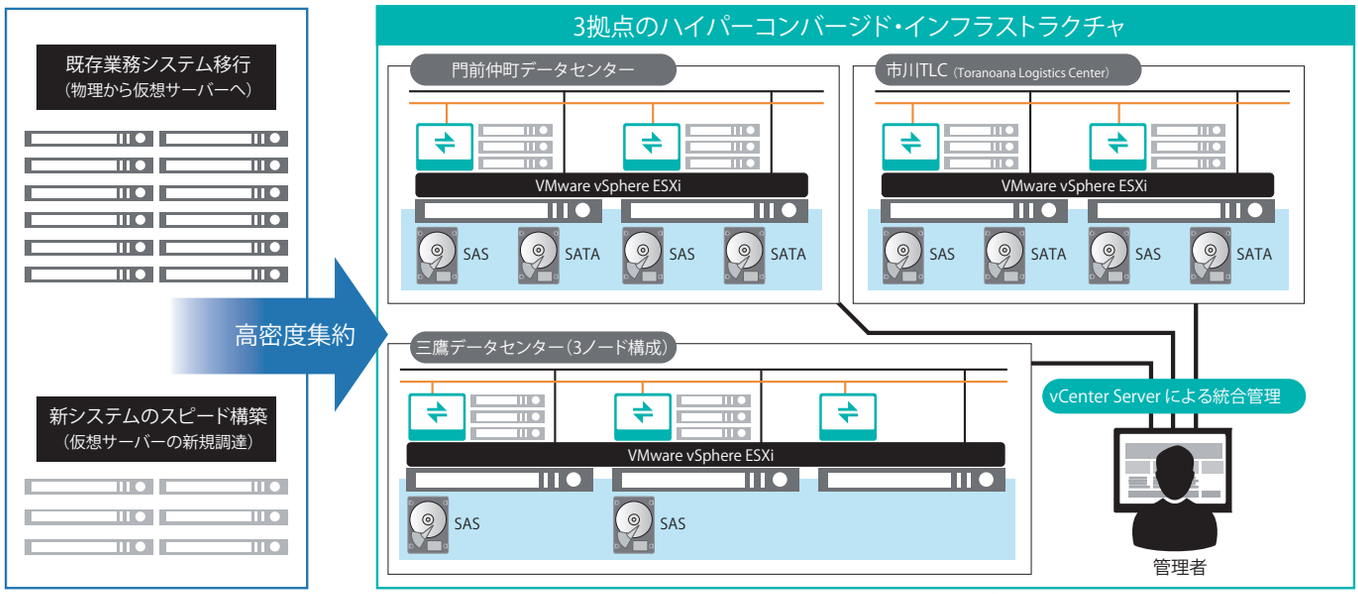
2016年9月から新システムは稼働を開始し、既存のアプリケーションを順次、HCIへ移行している。最初に、千葉県市川市にある物流センター内のサーバールームと、東京都内の門前仲町のデータセンターで稼働を開始。機能性と運用性が評価され、その後三鷹のデータセンターにも導入。現在3拠点でHCIを稼働させている。

新システムの導入に併せて、運用管理体制も強化した。VMwareの運用管理ツールである「vCenter Server」を利用して、仮想化環境をリアルタイムで監視している。これによって、システム基盤あるいは仮想マシンのいずれかに障害が発生した際に、即座に対応できるようになった。従来は、どのアプリケーションがどのサーバーで稼働しているのかを確認するだけでも大きな手間がかかっていたので、運用保守の手間は劇的に軽減された。

一連の取り組みによって、同社では年間のTCOを大きく削減することに成功した。運用保守に関わる人件費などを含めると、TCOは従来のシステムの3分の2になった。さらに、電力コストや保守時の部品代、省スペース化によるデータセンターのコスト削減など、サーバーに直接関係するコストに限ると従来の5分の1にまで削減できるという。

保山氏は、「自分たちが思っていた以上に集約できるということが分かりました。仮に既存サーバーをすべて集約すればラック数も現在の8分の1になると思います」と語る。

鈴宮氏は、「何よりも、この基盤があれば今後の新しいビジネスを、スピーディに展開することができます。将来の成長へ向けた準備ができたと考えています」と評価している。



より詳細な情報は、**www.datacore.jp** もしくはメール **datacore-japan-info@datacore.com** まで

データコア・ソフトウェア株式会社
〒101-0021 東京都千代田区外神田6-14-7 VORT末広町 5F

© 2011-2018 by DataCore Software Corporation, DataCore Software K.K. All Rights Reserved. DataCore、DataCoreロゴ、およびSANsymphonyは DataCore Software Corporationの商標です。他の製品名、サービス名および社名は、それぞれの会社の商標です。